

Special Interview OB・OGの今

Alumni Report

株式会社 A Standard 代表取締役

村井 忠寛 むらい ただひろ

波瀾万丈の競技人生を通して、
見えてきたセカンドキャリア。

北海道出身の私は、小学4年生の時に友人に誘われたのがきっかけでアイスホッケーを始めました。周り比べて競技開始も遅く上手くはありませんでしたが、6年生の時に友人とコーチとともに練習や筋トレを毎日行くと、最後の2つの地区大会で優勝できたのです。このことがプロセスを大事にすると結果に繋がることを知る原体験となっています。高校からはプロになることを目標に掲げ、今の自分に何が足りないのか、今何をすべきなのかを常に考えて練習を重ね、大学入学後は、「優勝から遠ざかっていたチームを絶対に自分達で変えてみせる!」と、1年時から強い意志をもって練習に取り組み、インカレを連覇(後に6連覇へとつながった)。4年時には主将となり、東洋大学史上初の年間3冠を成し遂げるまでになりました。チームの歴史を変えようと共に励んだ仲間やそのような環境を与えてくれた監督・スタッフたちとの出会いは私の大きな財産です。今年度、東洋大学は年間3冠、無敗優勝と輝かしい成績を残しました。素晴らしい結果であり、その歴史の礎となれたことを光栄に思います。

卒業後、プロアスリートとしてのキャリアは古河電工でスタートしました。ここで全力を尽し、現役引退後は会社員として管理職をめざす。そんなキャリアプランを描いていました。しかし念願の試合に出られるようになった矢先、状況は一変。チームの廃部を言い渡されました。今まであった当たり前が突然なくなる。学校や会社など皆さんの身近なことに置き換えると、その衝撃は容易に想像できると思います。他のチームへ移籍する選択もありましたが、当時の私はリスクを背負ってでもアグレッシブに挑戦できる20代前半。後悔はしたくないと、市民クラブとしてチームを存続させるために資金やスポンサー集めなどに奔走しました。そして、多くのファンや企業からのご支援のもと、チームは日本ホッケー界初の市民クラブ『H.C.日光アイスボックス(現:H.C.栃木日光アイスボックス)』として再スタートを切ることができました。「できないことはない。気持ちだけで何でもできる」トランジションに対し私が大事にしているこの考え方は、そういった経験のもとにあります。

大切なのは結果を得るためどう取り組み、
そこに到達したかというプロセス。

引退後、「H.C.栃木日光アイスボックス」の監督を経て現在、私はアスリートの育成やキャリア支援等を行う会社を立ち上げ、チームや学校などでの競技指導とともに、さまざまな活動をしています。その一つが、アスリートのデュアルキャリア[※]支援です。アスリートが競技生活を通して培える「自己と向き合う力」「人とのコミュニケーション力」「課題を発見し解決する力」の3つのスキルを、別のステージや次のキャリアでどのように活かしていくか。その点に重きを置き、大学などで現役アスリートのキャリア形成の支援を図っています。

私がかねてから、「プロスポーツ選手になったプライドではなく、そこに至るまでに積み上げた努力のプロセスにプライドをもつことを大切にしてほしい」と伝えています。あるプロスポーツ選手を支援した時のことです。その方は引退後、ある企業への就職を希望していました。そこで、その目標達成のため、定めたタスクに計画的に取り組むことと、志望理由や何を実現したいかなどをより具体的に細分化し書きまとめることを勧めました。面接の際にこれらの過程をアピールした結果、無事に就職することができました。私は、目標に辿り着くまでの計画性や行動力といったプロセスと努力を評価していただけたのだと嬉しく思いました。本当に大切なのは、目標到達まで試行錯誤を繰り返しながら取り組むことや前向きに行動する姿勢などといったプロセスであり、これらは活動を通じて培うことのできるスキルとなります。そして、それが生涯にわたって自身の土台となると私は考えています。このことはアスリートに限ったことではありません。

また、「自分のやりたいことがわからない」と言われることがよくあります。そんな時は、自分を知ることが大切にするよう伝えています。東洋大学の教育の柱の一つに「哲学」がありますが、自分自身について先入観にとらわれず客観的に深く考えていくと、やりたいことも自ずと見えてくるはず。これまでに何をしてきたのか、自分は何が好きで何を大切にしているのか。家族などの身近な人や今まで関わった人に、自分がどんな人間か聞いてみるのもいいでしょう。誰にでも皆、強みがあり弱みもあります。学生の皆さんには、人との関わりとともにさまざまな経験を通して自らの強みを発見し、自身の可能性を信じて次のステージを目指してほしいと思います。

※アスリートが将来設計を目的として、競技活動とそれ以外の進学や留学、就職など2つのキャリアを同時に並行して両立すること。



Profile

1998年、社会学部社会学科卒業。在学中はアイススケート部ホッケー部門に在籍し、2年時よりチームをインカレ優勝に導くなど強豪校としての礎を築く。卒業後は、古河電気工業株式会社で競技を続け、ユニバーシアード日本代表にも選出される。その後、H.C.日光アイスボックスで活躍し、引退後は同チームの監督を務めた。現在はアスリートの育成・キャリア支援等を担う会社を立ち上げ、コーチングや子ども向けスクールの運営、講演会等、多岐にわたり事業を行う。